

橋本熱処理（中央区南橋本）は「熱処理のプロ集団」を目指す企業です。あらゆる金属に欠かせない熱処理ですが、同社は1977年3月の創業以来、“専業”としてやってきただけに、そのノウハウは卓越しています。同社の場合、熱処理設備もオリジナル仕様に特注しており、他社が敬遠する直径1メートルを超える「長尺物」の熱処理までも得意としています。昨年にはフランス製の熱処理設備も導入するなど、設備投資にも積極的です。今回は荻野秀隆社長に話を聞きました。

—まずは事業内容について教えてください。

「当社は熱処理の企業です。先代が橋本の地で創業したことから『橋本熱処理』と名付けました。熱処理とはいわば『鋼に寿命を吹き込む仕事』です。金属を高温で加熱し冷却することで、硬くしたり、軟らかくしたり、錆びにくくしたりします。身近な電子部品や日用品、文房具のばねまで、あらゆる物に熱処理が施されており、逆に熱処理していない製品を探すのが難しいほどです。現在、取引先は約600社、熱処理する部品は年間数千点におよびます」

—真空炉を使用した熱処理も特徴です。

「熱処理と言えば、工場内が高温で、煙が出ているイメージがあります。しかし、当社の真空熱処理炉は文字通り、空気がない真空状態で熱処理する設備です。煙も出ません。炉の内部では空気の代わりに窒素ガスを使用し、それを循環させて金属をまんべんなく加熱してい

ます。熱処理の世界では、金属を早く冷ますと硬くなり、ゆっくりと冷ますと柔らかくなります。処理方法としては『焼き入れ』『焼き戻し』『焼きなまし』『焼きならし』などがあります。いずれも、使用する金属の種類や、供給元の材料メーカー、出したい特性などによって、熱処理のやり方が変わります。熱処理各社にとっては企業秘密の部分です」

—設備もオリジナルと聞きましたが、

「そうですね。当社は真空炉を7号機まで保有していますが、そのうち3台が『堅型』と呼ばれるものです。いずれも大手産業機械メーカーに特注しました。熱処理設備は横型が主流となっています

が、1メートルを超えるシャフトなどの長尺物を横向きで熱処理すると、素材にもよりますが1ミリ程度、微妙に曲がってしまいます。その点、当社の堅型は曲がりを極限まで抑えます。材質にもよりますが、約1500ミリのものが0.5ミリ以内の曲がりです。確かに、世の中に堅型真空炉は存在しますが、い

## 技術をひたすら追求 「熱処理のプロ集団」

### 堅型真空炉で差別化も

（株）橋本熱処理  
代表取締役

荻野 秀隆さん



ずれも大型に限られ、1メートル級の部品を少数を熱処理するには電気代がもつたないです。当社の設備は中小サイズに向いています」

—今後の目標をお聞かせください。

「当社のような熱処理業者にとって、最近の電気料金の値上げは大きく影響しています。とはいえ、妥協はしません。

当社では『橋本品質』をスローガンに掲げ、社員全員が徹底した管理体制のもとで作業を行っています。最近ではフランス製の真空炉も導入しました。設備投資も積極的にやっていきたいです。また、今後は鋼以外、いわゆる非鉄金属であるアルミや銅などの熱処理にも広げていきたいと思っています」